

---

# 君と二人、星空を見る。

松の慎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君と二人、星空を見る。

### 【Nコード】

N3936B

### 【作者名】

松の慎

### 【あらすじ】

俺と君は友達。俺には彼女がいるけれど、でもお前が好きなんだ。だから夜、2人で星空に誓う。「永遠に一緒にありますように」……切ない片思いをし合う2人の純情ラブストーリー。

恋はときに儂く悲しいものだ

ときに喜びを与えるものだ

そんなこと、知るよしもなかった。

「ねえちよい消しゴム貸してっ」

「えー？大事に使ってね」

「オツケーオツケー」

織から借りた消しゴムで間違えた文を消す。

消し終わったけど、織が気づいてないようだから俺は筆箱から赤のペンを取りだす。

そして「オンリー」を書く。

「あー！大事にしてって言ったのに！なんて書いたのっ？！」

「オンリー」

「はー?!」

「だから、『織』とオンリーを引っ掛けてーしかもその消しゴムは世界でたった1つだから『オンリー』なわけ」

「なにそれえ」

織はあははと笑う。

そして俺から消しゴムを取って、その文字を眺めた。

「ほんとだ、オンリー！」

織とは高2になってから知り合った。

同じクラスで、たまたま隣の席だったことから仲良くなったんだ。

俺には彼女がいる。

そして、織にも好きな人がいるらしい。

織の幼馴染の佑介と話してるのを偶然俺は聞いていた。

『織の好きな奴って誰だよー？』

『秘密ー』

『なんで今回は秘密なんだ？』

『んー・・・』

とにかく織は答えようとしなかった。

佑介は、好きな奴を織が教えてくれないのは初めてだと言っていた。

佑介に教えないくらいなんだから、きつと俺にも教えないだろう。

けど、好きな奴を隠したいって気持ち俺には少しだけわかる。

まあ俺の場合とはかなり違うけど。

俺、織に惹かれてるって最近気づいた。

この前のクリスマス彼女とデートをした。

街である店の前で彼女が止まった。

きれいなピアスが飾られている。

『ほしいなー。すっごいきれい』

大人びていて、宝石とかブランドを好む彼女。

『こんなのがほしいのか？どーせならあっちのキティ・・・』

言いかけたときに、はっとした。

俺今、なんでこんなこと思ったんだろ。

『キティ？』

『あ、いや・・・なんでもない』

どーせならあつちのキティちゃんシヨップの方が良いんじゃないか。向かいの店を指差してそう言おうとした。

なぜそう言ってしまったのか。

だって、織がキティちゃんを好きだと言っていたから。

毎日のように下敷きやストラップ、タオルを見せて言うもんだからつい口がすべった。

彼女とのデートの最中、俺は織を思い浮かべていた。

「岬くん。今日の運動部テーピング講座出る？」

「あー一応な。俺んちはほぼ全員で出る。一応俺出なきゃいけないし」

「そっか、岬くん部長だもんね」

「自分は？織だって副部长だろ」

「んーうちの部もほとんど出るみたい。でもあたしは出ないかなー」  
「なんで？」

「だってあたし怪我したら接骨院でいつもテーピングしてもらってるもん（笑）」

でも岬くんが出るなら出ようかな、とも考えてしまった。

でももう出ないって言ってあるし、仕方ないや。

あたしたちは、今年知り合った仲。

と言っても、あたしは去年から岬くんのこと知ってた。

カッコ良いつてことで女の子の間で人気だったから、あたしも一度

岬くんを見に岬くんのクラスに行ったことがあるもの。

岬くんには彼女がいるって知ってるけど、それでもあたしは岬くんを好きになった。

けど報われることはないから、この恋は誰にも言わないの。  
幼馴染の佑介にも言わない。

好きになってもう何ヶ月経つんだらう。

好きって言ったって、叶わない。

隣で笑ってくれるからいつまでたっても諦められない。

いつそのことはやく好きじゃなくなれたら良いのに、とさえ思うこともあった。

友達には彼氏がいて、クリスマスのお話を聞かされて心底うらやましいと思う限りだった。

きっと岬くんも彼女とデートしたんだらうな。

そう思うことは、とても儂い気持ちになる。

聖なる夜に好きな人と過ごせるって、どんなに幸せなことなんだらう。

あたしにはなんか運がないみたい。

中学の頃付き合ってた人とも、クリスマス前に別れた。

・・・運がないっていうより、あたしに度胸がないだけなんだけど。

2週間後。

いつものように、時が過ぎてゆく。

あたしとあなたの関係も、いつも通りのまま。

「明日の土曜は公開授業だから普段通り学校あるぞ。部活で来れない奴は言いにこい」

帰りのHRで担任がそう言った。

あたしはすかさず立ち上がった。

すると、隣の席の岬くんも同時に立った。

「バレー部、二ノ宮です」

「サッカー部、有栖川」

「バスケット部の宮内です」

みんな報告をして、席につく。

そしてあたしは岬くんに話しかけた。

「サッカーも試合？バレー部もなんだ」

「へえ。一緒だな」

「がんばろーね！」

「おう！」

明日は試合。

あたしは副部長、そしてエース。

彼もまた部長にして、エースストライカー。

同じポジションってことが余計励みになる。

夜、もう11時を回っていた。

あたしは自分の部屋の窓を開けた。

「おー！星すっごく出てる！！」

その星たちは、暗い夜空の中でキラキラと輝いていた。別に流れ星があるわけでもないけど、あたしは願った。

「明日の試合、勝てますように」

きっと、岬くんもこの夜空を見て願っているに違いない。

一緒に勝てますように……と。

応援してくれる人がいるなら、きっと頑張れる。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「そろそろ寝るか」

ベッドに入ろうとしたけど、ベランダにシーツ干してたのを思い出して、ベランダのドアを開けた。

「あちやゝ冷えてるわ」

冷え切ったシーツを取り込んで、ベランダを出ようとした。

そのとき、不意に上を見上げた。  
満天の星空だ。

「……そういえば織も明日試合だって言ってたっけ」

思い出したようにポツリと呟く。

明日勝てるだろうか。

そんな不安もあったけど、でもきっと大丈夫。

「一緒に勝てますように」

俺があいつを応援してるように、きっと織だって俺を応援してるに  
違いないんだ。  
だから大丈夫。

織もこの夜空を見てるだろうか。

この星空を見て、きっと同じことを思っているんだろうな。

そんな思いを抱いて、俺は部屋に戻って寝た。

翌日。

試合はもう後半。

今日の相手は県でもベスト16に入るチームだ。

「ボール回せ！相手にボールを渡したら終わりだと思え！！」

「はいっ！！」

得点は1・0で、うちの学校がリードしてる。  
けど逃げ切らなきゃ絶対に逆転される。

やるしかない。

このチームに勝たなきゃもう次はないんだ。

織もきつと頑張ってる。  
だから俺も、頑張らなきゃ。

「こつちだ武田！」

「キャプテンお願いしますー！！」

パスされたボールを追いかけ、夢中で走る。

俺についてるマークやディフェンダーを押し切って、思い切りボールを蹴った。

「ゴオオオールツツ！！！！」

キーパーの手がわずかに届かず、シュートが決まった。

「キャプテン！」

「ナイツシューー！！！！」

「さあこのまま行くぞー！！」

「おおー！！」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「みんな落ち着いて！次決めなきゃ逆転されるよー！」

「はいー！！」

あたしが掛け声をする。

今最終セットの終盤。

「織、次頼むよ」

部長でもありセッターが、あたしの耳元でそうささやく。  
あたしは頷いた。

この局面であたしにトスがあがるのは当たり前。  
なにがなんでも次は決めなきゃ。

「織っ！！！」

トスがあがる。

そうだ、なんにも思いつきり打って決めるだけがエースじゃない。  
なにがなんでも決める、それがエースだ。

「なっ・・・フェイント?!」

相手の声とともに、ボールが相手コートに落ちる。

「ナイスフェイント！」

「よくやった織!!！」

「じゃあこっからサーブで点差広げるよ！」

「はい!!！」

粘りに粘った。

あたしたちは、やれるだけやった。

けれど

今、終了のホイッスルが響く。

「試合終了!!」

たった2点。

たった2点先にとれずに敗北。  
第3セット、24-26。

あと一歩が届かずに惜しくも敗退しました。

決勝まで見て行って、その帰りに学校へ寄った。  
まだ5時半だけど空はもう暗くなっていた。  
部室へ行って荷物を置き、そして帰ろうとした。

そのとき、グラウンドで人影が動くのが見えた。  
あたしは目をこすってよく見た。  
サッカーボールでリフティングしてるのが分かった。

「岬……くん？」

あたしの方がグラウンドに響く。  
その人はこっちに振り向いて言った。

「織」

やっぱり岬くんだった。

岬くんはあたしに近づいてきた。

「お疲れ。どうだった？」

「……負けちゃった。あと2点が届かなくて」

あたしはうつむく。

なんとなく岬くんの顔をまともに見れなかった。  
泣いてしまいそうだったから。

「岬くんは？」

「勝った。明日また試合なんだ。そっか、負けちゃったんだ」

「うん」

「でも頑張ったんだろ？俺も頑張ったし織も頑張った。それだけで十分だよ」

確かにあたし、頑張った。

いつも以上に頑張った。

それでもだめだったんだから仕方がないじゃない……

「……ありがと。あたし次また頑張るよ」

「その意気だ！」

やっぱり岬くんには惹かれてしまうよ。

あたしが辛いときに、一番言ってほしい言葉を言ってくれるんだ。

恥ずかしいけど、涙が出てくる。

岬くんの前で泣く日がくるなんて夢にも思ってたかった。

あたしはすぐに涙を拭こうとしたけど、なかなか止まらなかった。

あたしは、涙が枯れても足りないくらい、負けたのが死ぬほど悔しいくらい、一生懸命頑張った。

勝てなかったけど、もう終わってしまったけど、でもそれでも精一杯やった。

「我慢しなくて良いよ。泣きたいときは思いっきり泣いた方が良い」  
いつもならきつと笑ってるだろうけど、今日の岬くんはそうじゃない。

誰だってスポーツマンなら知ってる、負ける悔しさ。  
負けて泣く人をバカにする人なんて1人もいない。

「うん……」

なかなか涙が止まらないでいるあたしの隣で、岬くんはずっとリフトイングをしていた。

あたしが泣き止むのを待っていてくれた。

「あ。星」

「え？」

「ほら織、めっちゃ星出てる。昨日もすごかったもんなあ」

「うん。昨日の夜も空眺めてた」

「あ、織も？」

「じゃあ岬くんも？同じだね。あたしねー星に願ったんだ」

「一緒に勝てますように」

俺と織の声がハモる。

お互い顔を見て笑った。

「同じこと考えてたんだな」

「きつと岬くんもそう思っていてくれるって思ってた」

「俺も」

俺たちは知り合ったのは今年だけど、でも俺は去年からずっと織を知ってる。

偶然体育館の前を通ったときにバレー部が練習試合してて、ちょうど織にトスが上がった。

織は一度目はブロックされてたけど二度目はスパイクを決めた。

先輩に混じってレギュラー勝ち取って活躍してるなんてすげえ……

って思った。  
俺もレギュラーだけど、でももっちな頑張らなきゃってそのとき思ったんだ。

そのときから織は俺の中で大きな存在になっていた。

「織」

俺には彼女がいる。

織には好きな奴がいる。

けれど、もう逃げられない。

自分の気持ちを隠すことはできない。

いくらここで俺が思いを伝えても叶うことはないだろう、失恋して終わってしまうだろう。

思いが叶わないことがこんなにも辛いこととは知らなかった。

だけど、みんなこうして辛い思いをしてる。

俺だけじゃないんだ。

「好きだ」

流星星が流れているなら願う。

永遠に一緒にありますように。

そんなロマンチックなこと、恥ずかしくて言えないけど。

「え……？だって岬くん、彼女……」

「でもずっと好きだった。織に好きな奴がいるって知って……別れられなかった。けど、もう自分の気持ちに嘘はつかないって決めたんだ」

「嘘……」

「ほんと」

「だってっ……」

「嘘じゃない」

ほんとならもっとはやく別れるべきだった。

織が俺のことをどう思ってたようが、関係なしに。

振られるのが怖くて、彼女にも別れ出すことも出来ない俺はとて  
臆病で情けない。

けれど

夜空を見上げて織を思って

交わした約束のために必死になる俺は好きだと思った。

だから、俺が好きでいられる俺でいたいんだ。

それをするためには勇気が必要だと思った。

その勇気を示すのは今しかない。

「あたし……ずっと好きだった。ずっとずっと岬くんが……」

「織……」

「嘘みたい……っ……嬉しいよお」

泣きながら喜ぶ織を愛しく思った。

夢じゃ……ない、夢じゃないのか？

「もっとはやく言うべきだったな」

「でもあたしたち……あたしは岬ちゃんと友達でいられた時間も  
っても尊いものだと思うよ」

片思いをした。

俺のたった一步の勇気が足りなくて長い間すれちがってしまってい

たけれど、でもそれでもこの気持ちに偽りはないと、永遠であると知れた。

彼女とは告白されたからなんとなく付き合っていただけで、好きにはなれなかった。

俺が好きになったのは、隣の席の元気な女の子。

切ない片思いで、儂い思いばかり募って・・・けれどそれを悲しいとは思わなかった。

好きになれたこと、織のそばにいられたことはなにより俺の宝物。

「ねえ岬くん」

「ん？」

「昨日星にお願いしたじゃない？だから今日もお願いしようよ」

2人で見つけた一等星。

指差して眺めた。

「なんて？」

「なんだと思う？」

「うーん、そうだなあ……………」

君と一緒にいられた時間も、そして今も俺にとってはとても尊いことだから。

俺にこの尊さをくれた夜空に誓うよ。

「「永遠に一緒にありますように」」

睦月のある夜

学校のグラウンドで君と俺は星空に向かって、永遠を誓った。

f  
i  
n

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3936b/>

---

君と二人、星空を見る。

2010年11月29日08時35分発行